

生産技術の確立により高所得経営へ！

- 負債農家からの脱却 -



黒木 章夫 (くろき・ふみお)
宮崎県日向市

< 推薦理由 >

本県の養豚飼養農家は、高齢化や後継者不足、環境問題等から小・中規模の飼養者層を中心に年々減少傾向にある。平成13年2月現在の飼養戸数及び子取り用雌豚の飼養頭数をみると、飼養戸数798戸で子取り用雌豚の飼養頭数78,132頭、平成12年度肥育豚出荷頭数1,394千頭（全国2位）である。1戸当たりの飼養頭数は842頭と年々増加している。

県内の養豚一貫経営事例調査と全国先進経営を比較すると、出荷肥育豚枝肉1kg当たりの枝肉販売単価は、都市周辺部と比較して市場流通価格差以上に販売単価が低迷しており、種雌豚1頭当たりの所得が低くなっている。

このような状況において当事例は、一時、負債整理資金を借り受ける状況まで陥ったが、原点に戻り、基本的な飼養管理技術と経営管理技術を習得し、生産性向上を図った結果、現在では県内トップクラスの事例へと成長してきた。（家族労働力当たり年間所得約16,000千円、県の目標8,000千円以上）

このことから、この事例が他の経営体に及ぼす影響が大きく、養豚農家の模範となる生産技術及び所得向上に向けての取り組みは普及性に優れている。

その評価される内容は次ぎのとおりである。

経営主自ら改善目標を掲げ関係機関の指導支援に対する真摯な取り組み。

豚の生理機能を十分熟知した飼養管理体系確立による高い生産性と高い所得率

。

自家施工による飼養管理効率の高い豚舎設計と豚に合わせた豚舎環境。

経営主自らの経験を生かした肉豚部会の運営。（生産技術に絞った勉強会開催

等)

家畜排せつ物処理法に向けたふん尿処理施設の整備、処理技術の習得。

養豚一貫経営では基本的な飼養管理の確立及び環境対策を無視できない状況化になってきている。当事例は、基本に忠実な飼養管理を徹底して行い、併せて、記帳はもとより生産技術からの数値管理を行ってきたことが、経営改善の図られた大きな要因となっている。

当事例の様な経営改善へ向けての取り組みを如何に速く実行できるかは、支援する指導機関の指導助言を素直に受け入れ、柔軟に対応することの重要性とこの取り組みが高所得を達成できる証となった。

以上のことを踏まえ、本県の養豚一貫経営管理技術の優良事例として推薦する。

(宮崎県経営部門審査委員会委員長 齊藤 峯彦)

< 発表事例の内容 >

1 経営管理技術や特色ある取り組み

1) 背景

高校卒業と同時に地元養豚場に研修を兼ねて就職し、2年後の昭和51年、経営主20歳を機に、県の育成資金250万円を活用し母豚10頭の繁殖経営を開始した。

実家は、養豚経営の経験はなく不安も大きかったが、JAとの子豚生産契約を締結して頂き安心して経営に取り組むことができた。

昭和55年には母豚60頭経営までスムーズに規模拡大を行うことができた。

しかし、昭和63年位から養豚情勢の変化に伴い、養豚繁殖経営では所得確保が非常に厳しくなり、商系の飼料メーカーからの資金約5,000万円を活用し一貫経営へ移行した。

昭和63年から平成4年までの約5年間、商系の飼料を使い、商系の食肉処理場へ出荷してきた。

その間、肥育豚の出荷成績は、種雌豚1頭当たり年間出荷頭数19頭で、商系の枝肉格付けは自主格付けとして上物率約60%で上々の成績であった。

しかし、購入飼料は広島県から取り寄せる仕組みで運賃の負担が増え若干単価が高かったことと、経営管理を上手く行えていなかったことなどから、エサ代の未払金が増加し、経営の悪化を招いていった。

規模拡大に伴い過剰な施設投資と成績不振から資金繰りが困難となり、JAの支援を受けるために、購入飼料と肥育豚の出荷先を商系からJA系統へ変更した。

平成5年に畜特資金の融資を受けた。

しかし、JA系統では、日本食肉格付協会の格付基準が適用されていた。肥育豚の出荷成績は、上物格付率で約30~40%と低く、肥育豚売り上げ高も低く、所得が得られる状況ではなかった。そこで県経済連及び関係機関の協力を得て経営改善に向けた取り組みを実施した。

2) 取り組み

売上げを左右する肥育豚成績は、上物格付率約30～40%の低さを改善するため、子豚から肥育豚出荷時まで適正な発育と定量・定時・定質の出荷に取り組んだ。

(1) 基礎技術の習得

県経済連の出先機関からの支援指導を受け、肉豚部会では2カ月に1回の勉強会に積極的に参加した。

まず、全農の養豚飼養管理マニュアルに沿った基礎的な技術を修得した。

(2) 種豚管理の確立

種雌豚の更新淘汰を定期的実施し、もと豚を県経済連原種豚センターより導入することで安定した生産基盤が確立された。

繁殖成績を向上するためには、年間季節を問わず種雌豚のボディーコンディションを如何にベストに調整するには、妊娠期及び授乳期の飼料給与量のコントロールが重要なポイントになっている。

夏場は特に涼しいうちに飼料の給与を行い、午前中までに豚舎のふん除去までに行い、午後の飼養管理は日の入り前後の夕方涼しくなった時期に行うなど、豚の生理機能を重視した飼養管理を徹底して行っている。

分娩後、種雌豚の飼養管理は授乳期間の飼料の摂取量とボディーコンディションと子豚の飼養管理までの管理技術を習得している。離乳後の種雌豚は発情を促すために離乳後3日以内にホルモン剤の投与を行い離乳後7日以内に発情徴候を確認し交配適期に種付けすることを心がけている。

交配は、1発情3回の交配を基本としている。1回目の交配は種雄豚を乗駕させ交配する。交配間隔は10～12時間間隔で、経営主がA I (人工授精)を2回行う。飼養管理を午前6時から午後6時まで行うことで交配間隔も10～12時間間隔にでき、豚の生理機能に応じた交配管理が成立している。

(3) 肥育管理の確立

離乳後の子豚管理を重視し、特に離乳後日齢25日(体重5kg)から子豚体重30kgに到達する日齢について子豚舎の飼養環境(温度、湿度、換気)と飼料給与及び給水管理を重点に置き、きめ細かな管理をしている。特に、子豚飼養マニュアルに沿った増体が出来ているか、日齢と増体、給餌量を確認している。

肥育豚は、発育マニュアル曲線にのることで肥育日数及び出荷時期も予測できる。肥育豚の飼養管理について肥育舎へ仕向けた子豚は雄と雌を別飼いとじて去勢豚は肥育後期飼料の切替時期を早めに行い、逆に雌豚については肥育後期飼料の切替を遅くすることで雌と去勢の生理機能に応じた飼養管理についてきめ細かい工夫を行っている。

肥育用飼料を県経済連の肉質重視で、かつ、ふんの量が少なく環境に優しい環境保全型飼料で行っている。

肥育用飼料は去勢にT D N76%、D C P11%、雌にT D N78%、D C P10%のものを与えている。肉質を考慮し、去勢にドライ、雌には、ウエット給餌としている。

(4) 豚舎環境の整備

豚舎は全て地元の鉄工所と左官業者等を活用し、全て自家施工により建てている。自分の使いやすい豚舎構造ができ、また、若干の改造は容易にできるようになっている。

離乳舎は、温度管理と換気の調節が重要であり、双方が容易に出来るような設計を行っている。

離乳後の交配豚房が、雌豚と雄豚と接触できる構造になっており、発情の兆候を促すことができる様に工夫されている。

子豚舎と肥育舎は、月齢の異なる豚が同居出来ない仕組みになっている。このことは、豚疾病の水平感染を防ぐことを目的にしている。

豚房環境は、豚の居住場所の換気と豚の移動や出荷時に省力化できるよう工夫がされている。

3) 取り組みの成果

(1) 安定した繁殖成績

もと豚は遺伝的に優れた県系統豚（ハマユウ）を県経済連原種豚センターより定期的に供給を受けている。

人工授精（A I）を取り入れた1発情3回交配の技術導入により、優れた繁殖成績となっている。

- ・種雌豚当たり分娩回数2.40回
- ・種雌豚1頭当たり年間哺育開始頭数.....23.4頭
- ・種雌豚1頭当たり年間離乳頭数22.2頭
- ・育成率95.0%

(2) 飼料効率

離乳後から肥育豚出荷までの飼養管理の徹底により飼料効率が優れている。

子豚・肥育期の飼料給与について、通常不断給餌で1週間に2回6時間程度絶食することで飼料の無駄をなくし豚の健康状態も把握できる。

- ・飼料要求率農場3.05
- ・飼料要求率肥育段階.....2.56

(3) 高い出荷成績の確立

肥育豚の事故率の低減と系統のマニュアルに沿った飼養管理の徹底により高い出荷成績となっている。

肥育豚後期から出荷まぎわまで肉質を重視し、1頭ごとに吟味し特に肉付き、背脂肪の状況を見ながら雌豚は体重を上げ、また逆に去勢豚は体重を抑え、細かく調整し出荷時に体重を測定し出荷している。

- ・種雌豚1頭当たり年間出荷頭数.....21.5頭

- ・離乳後事故率..... 6.3%
- ・上物以上の格付け割合.....81.6% (中 - 13.3%、並 - 4.4%)
- ・平均出荷体重.....112Kg
- ・平均枝肉重量.....73.1Kg

(4) 高所得の確保

(1) ~ (3)の飼養管理の基本が確立されていることで高所得につながっている。

- ・年間所得総額..... 16,276千円
- ・種雌豚 1 頭当たり所得.....125,014千円
- ・家族労働力 1 人当たり年間所得..... 9,574千円

経営主本人の意識改革と前向きな取り組み、家族全員の協力が得られた成果である。

2 経営・活動の内容

1) 労働力の構成

(平成13年7月現在)

| 区分 | 続柄 | 年齢 | 農業従事日数 | | 備考 |
|------|----|----|--------|--------|--------------------------------------|
| | | | | うち畜産部門 | |
| 家族 | 本人 | 45 | 330 | 330 | 9.4時間/日 年間3,092時間 |
| | 妻 | 45 | 50 | 50 | 4.2時間/日 年間 208時間 |
| | 長男 | 11 | 0 | 0 | |
| | 次男 | 3 | 0 | 0 | |
| | 三男 | 1 | 0 | 0 | |
| 常雇 | 父 | 75 | 300 | 300 | 2時間/日 年間 600時間 |
| | 母 | 70 | 300 | 300 | 2時間/日 年間 600時間 |
| 臨時雇 | なし | | | | |
| 労働力計 | 4人 | | 980日 | 980日 | 家族労働時間：年間3,300時間 雇用労働時間：年間1,200時間 |

2) 収入等の状況

(平成12年1月～12月)

| 区 分 | 種 類 品目名 | 作付面積 飼養規模 | 販売量 | 販売額・ 収入額 | 収 入 構成比 | 概ねの 所得率 |
|------|------------|--------------|--------|-------------|------------|------------|
| 農業収入 | 養 豚 | 母豚130頭 | 2,800頭 | 82,604千円 | 100.0% | 19.2% |
| 農外収入 | | | | | | |
| 合 計 | | | 2,800頭 | 82,604千円 | 100.0% | |

3) 土地所有と利用状況

(単位：a)

| 区 分 | | 実面積 | 畜産利用地 | | 備 考 | |
|-----------------------|------------------|-----|-------|----|-----|---------|
| | | | うち借地 | 面積 | | |
| 個 別 利 用 地 | 耕 地 | 田 | 20 | | | |
| | | 畑 | 30 | | | |
| | | 樹園地 | | | | |
| | | 計 | 50 | | | |
| | 耕 地 以 外 | 牧草地 | | | | |
| | | 野草地 | | | | |
| | | 計 | | | | |
| | 畜舎・運動場 | | 80 | 80 | 80 | 畜舎用地70a |
| | そ の 他 | 山 林 | | | | |
| | | 原 野 | | | | |
| 計 | | | | | | |
| 共同利用地 | | | | | | |

4) 家畜の飼養状況

(単位：頭)

| 区 分 | 種 豚 | | 繁殖候補豚 | | 子 豚 | 肥育豚 |
|-----|-------|-----|-------|-----|-----|-------|
| | 雌 | 雄 | 雌 | 雄 | | |
| 期 首 | 137 | 6 | 13 | 1 | 553 | 1,009 |
| 期 末 | 129 | 6 | 7 | 0 | 671 | 906 |
| 平 均 | 130.2 | 5.5 | 11.1 | 1.0 | 612 | 958 |

5) 施設等の所有・利用状況

| 種類 | 構造 資材 形式能力 | 棟数 面積 数量 台数 | 取得 | | 所有 区分 | 備考 (利用状況等) |
|-------|------------------|----------------------|------|---------|------------|---------------------------------------|
| | | | 年 | 金額(円) | | |
| 畜舎 | 分娩舎 | 鉄筋平屋 | 225㎡ | 1997 | 2,000,000 | 個人 |
| | ストール舎 | " | 416 | 1988 | 9,254,000 | " |
| | 子豚舎 | " | 420 | 1988 | 6,698,000 | " |
| | 肥育舎1 | " | 564 | 1988 | 10,453,000 | " |
| | 肥育舎2 | " | | 1988 | 860,000 | " |
| | 分娩舎 | " | 100 | 1992 | 2,219,000 | " |
| | 離乳舎 | " | 200 | 1997 | 2,344,336 | " |
| 施設 | 管理舎 | 木造 | 1棟 | 1982 | 1,300,000 | 個人 |
| | 堆肥舎1 | 木造・コンクリート | 330㎡ | 1981 | 1,200,000 | " |
| | 堆肥舎2 | " | | 1988 | 2,344,000 | " |
| | 原水槽 | コンクリート | 1 | 1988 | 1,463,000 | " |
| | 出荷場 | 鉄骨・コンクリート | 1 | 1988 | 938,000 | " |
| | 浄化槽 | 連続式活性汚泥 | 1 | 2000 | 31,009,153 | リース |
| | | | | | | 畜産環境リース 1/2補助 自己負担額 15,505千円 |
| 機械 | 電気工事一式 | | 1 | 1988 | 1,850,000 | 個人 |
| | 動噴1 | | 1 | 1983 | 130,000 | " |
| | タンク | | 1 | 1987 | 250,000 | " |
| | 自動給餌機 | | 1 | 1988 | 2,861,000 | " |
| | 総合集糞装置1 | | 1 | 1988 | 2,540,000 | " |
| | 総合集糞装置2 | | 1 | 1988 | 1,838,000 | " |
| | 飼料タンク | FRP | 1 | 1988 | 710,000 | " |
| | ポンプ1 | | 1 | 1990 | 381,100 | " |
| | ポンプ2 | | 1 | 1990 | 245,000 | " |
| | ケーブルコンパア- | | 1 | 1993 | 437,000 | " |
| | 乗用車 | 2200cc | 1 | 1995 | 2,700,000 | " |
| | 軽乗用車 | 660cc | 1 | 1997 | 1,196,775 | " |
| | 溶接機 | | 1 | 1997 | 299,000 | " |
| | ホイロダ- | | 1 | 1998 | 2,425,500 | " |
| | トラック | 2t | 1 | 1988 | 315,000 | " |
| | ポンプ | | 1 | 1998 | 259,508 | " |
| | 省電装置 | | 1 | 1998 | 202,000 | " |
| | パソコン | | 1 | 1998 | 291,820 | " |
| | ショベル | | 1 | 1998 | 700,000 | " |
| | 軽トラック | 660cc | 1 | 1999 | 1,199,727 | " |
| 動噴2 | | 1 | 1999 | 199,500 | " | |
| トラクター | 14ps | 1 | 1999 | 997,500 | " | |
| | | | | | | 中古 |
| | | | | | | 中古 |
| | | | | | | 中古 |

6) 経営の推移

| 年次 | 作目構成 | 頭数 | 経営および活動の推移 |
|-------|----------|----------------|---|
| 昭和48年 | 椎茸、みかん、米 | | 高校卒業 地元養豚場で研修開始。 |
| 51年 | 養豚 | 母豚10頭 繁殖経営 | 経営主20歳を機に、養豚経営をスタート。 県の後継者育成資金250万円を借り入れ、母豚10頭の子豚生産（繁殖経営）を開始。 生産された子豚は、JA肥育センターに契約出荷。 |
| 55年 | 〃 | 母豚60頭 繁殖経営 | 母豚60頭規模となり、毎月の子豚出荷頭数が100頭を超えるようになった。 |
| 63年 | 〃 | 母豚100頭 一貫経営 | 取引先をJA系統から商系へ変更し、母豚100頭一貫経営へ経営を転換と規模拡大を図った。 規模拡大に伴う資金は飼料メーカーより5,000万円の融資を受けた。 |
| 平成2年 | 〃 | 〃 | 結婚 |
| 5年 | 〃 | | 飼養管理の不備から経営悪化。 |
| 9年 | 〃 | 母豚130頭 一貫経営 | 資金繰りが厳しく経営改善を図るうえでJA系統より、約5,500万円の畜特資金を借入れた。 全農の補助事業を活用し、母豚130頭へ規模拡大した。 |
| 10年 | 〃 | 〃 | 人工授精（AI）技術を導入し、交配に掛かる時間の低減と安定した生産技術の確保に努めた。 離乳舎整備により、離乳後の発育が良好。 |
| 12年 | 〃 | 〃 | 生産性の向上に伴い、所得が大幅にアップ。初めて所得1,000万円以上を確保できた。 |

7) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績

| 期 間 | | 平成12年 1月～12月 | | 経営実績 | 畜産会指標 |
|--------------------|-----------------------|------------------------|---------|---------|---------|
| 経営の概要 | 労働力員数(畜産) | 家族(人) | | 1.7 | 2.0 |
| | | 雇用(人) | | 0.6 | 0.5 |
| | 種雌豚平均飼養頭数(頭) | | 130.2 | 80 | |
| | 肥育豚平均飼養頭数(頭) | | 958 | | |
| | 年間子豚出荷頭数(頭) | | - | - | |
| 年間肉豚出荷頭数(頭) | | 2,800 | 1,680 | | |
| 収益性 | 養豚部門年間総所得(千円) | | 16,276 | 8,656 | |
| | 種雌豚1頭当たり年間所得(円) | | 125,014 | 108,203 | |
| | 所得率(%) | | 19.7 | 18.1 | |
| | 種雌豚1頭当たり | 部門収入(円) | | 634,442 | 598,387 |
| | | うち肉豚販売収入(円) | | 622,937 | 591,362 |
| | | 売上原価(円) | | 488,552 | 490,890 |
| | | うち購入飼料費(円) | | 287,536 | 296,215 |
| | | うち労働費(円) | | 37,788 | 62,775 |
| うち減価償却費(円) | | 25,464 | 37,500 | | |
| 生産性 | 繁殖 | 種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数(回) | | 2.4 | 2.3 |
| | | 1腹当たり分娩頭数(頭) | | 10.6 | 10.8 |
| | | 1腹当たり子豚ほ乳開始頭数(頭) | | 9.8 | 10.2 |
| | | 1腹当たり子豚離乳頭数(頭) | | 9.3 | 9.7 |
| | | 子豚育成率(ほ乳開始～離乳)(%) | | 95 | 95 |
| | | 種雌豚1頭当たり年間子豚出荷・保留頭数(頭) | | 22.2 | 22.3 |
| | 肥育 | 種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数(頭) | | 21.5 | 21 |
| | | 肥育豚事故率(%) | | 6.3 | 6.0 |
| | | 肉豚出荷時 | 日齢(日) | 187 | 190 |
| | | | 体重(kg) | 112 | 112 |
| 平均肥育日数(日) | | 162 | 165 | | |
| 肥育豚飼料要求率 | | 2.56 | 2.9 | | |
| トータル飼料要求率 | | 3.05 | | | |
| 枝肉1kg当たり平均価格(円) | | 376 | 380 | | |
| 枝肉規格「上」以上適合率(%) | | 81.6 | 65 | | |
| 種雌豚1頭当たり投下労働時間(時間) | | 34.6 | 68.8 | | |
| 安全性 | 総借入金残高(期末時)(万円) | | 1,170 | | |
| | 種雌豚1頭当たり借入金残高(期末時)(円) | | 89,869 | | |
| | 種雌豚1頭当たり年間借入金償還負担額(円) | | 53,703 | | |

(2) 技術等の概要

| | |
|---------------|---------------|
| 主な飼養品種 | 種雌豚：L W、種雄豚：D |
| 協業・共同作業の実施 | なし |
| 自家配合の実施 | なし |
| 施設・機器等共同利用の実施 | なし |
| 生産部門以外の取り組み | なし |
| 種豚の整備 | 外部導入主体 |
| S P F 豚生産 | なし |
| 繁殖豚の飼養方式 | ストール |
| 雌雄別飼いの有無 | 行っている |

3 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

1) 家畜排せつ物の処理方法

(1) 固形分の処理（堆肥化処理等）

豚舎は全て固液分離方式で種豚舎・子豚舎・肉豚舎の床は一部をスノコ方式として作業の省力化を図るためにスクレーパーによる固液分離を徹底している。

分娩舎・離乳舎は、手かきで固形物（ふん）を分離し、他の各豚舎からスクレーパーで固形物（ふん）を収集しスクリュコンベアーで堆肥舎へ搬送される。

堆肥舎は、作業性を重視した効率の良い施設として経営主自ら設計し、施設の施工は地元の左官業者及び大工業者を活用し低コストを図った。堆肥化施設の発酵槽部分は、発酵熱時にブロックの劣化を防ぐためにブロック構造ではなく、経営主自ら板枠を作り生コンクリートの構造とし耐久性を重視して低コストで省力化した施設となっている。

堆肥舎へ搬送されたふん（固形物）は、容積重及び水分調整のために熟成した堆肥と鋸屑に発酵資材を混合しショベルローダーにて3日に1回切返し堆積発酵させる。

熟成堆肥は、地元の耕種農家及び有機野菜農家へ2トントラック1台4,000円で販売し一部は隣接の耕種農家へ無償譲渡している。

(2) 液体（尿・汚水）の処理

豚尿汚水は、連続式活性汚泥処理方式で処理している。豚舎構造は固液分離方式で尿・汚水を分離し原水槽へ貯留し、次ぎにスクリーンで穀類の未消化繊維や毛等の固形物を除去し固形物は堆肥化処理する。

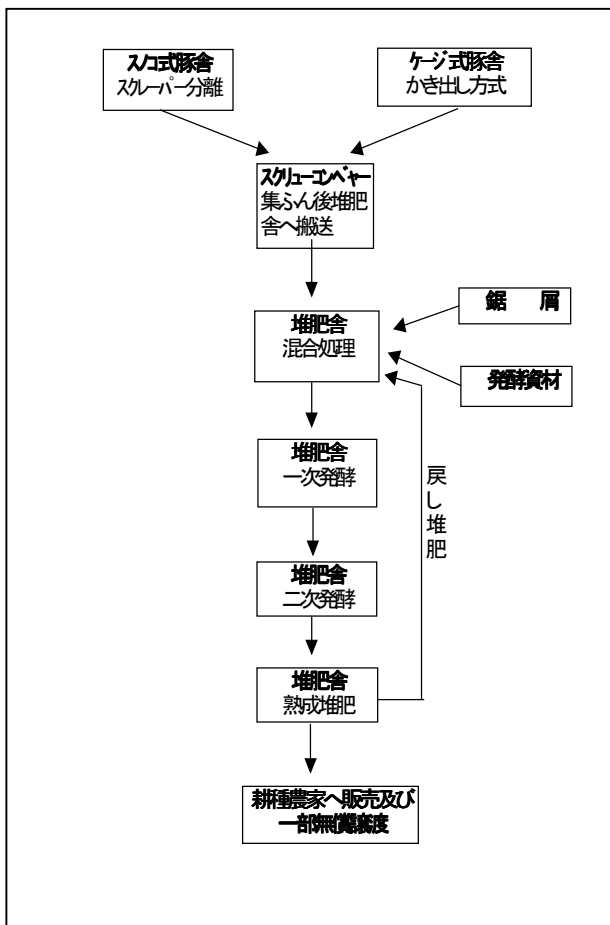
流量調整槽から流量計で一定の汚水量を第一沈殿槽へ送り沈殿汚泥（生

汚泥)は凝集剤で固定化して脱水機で絞り堆肥化処理する。

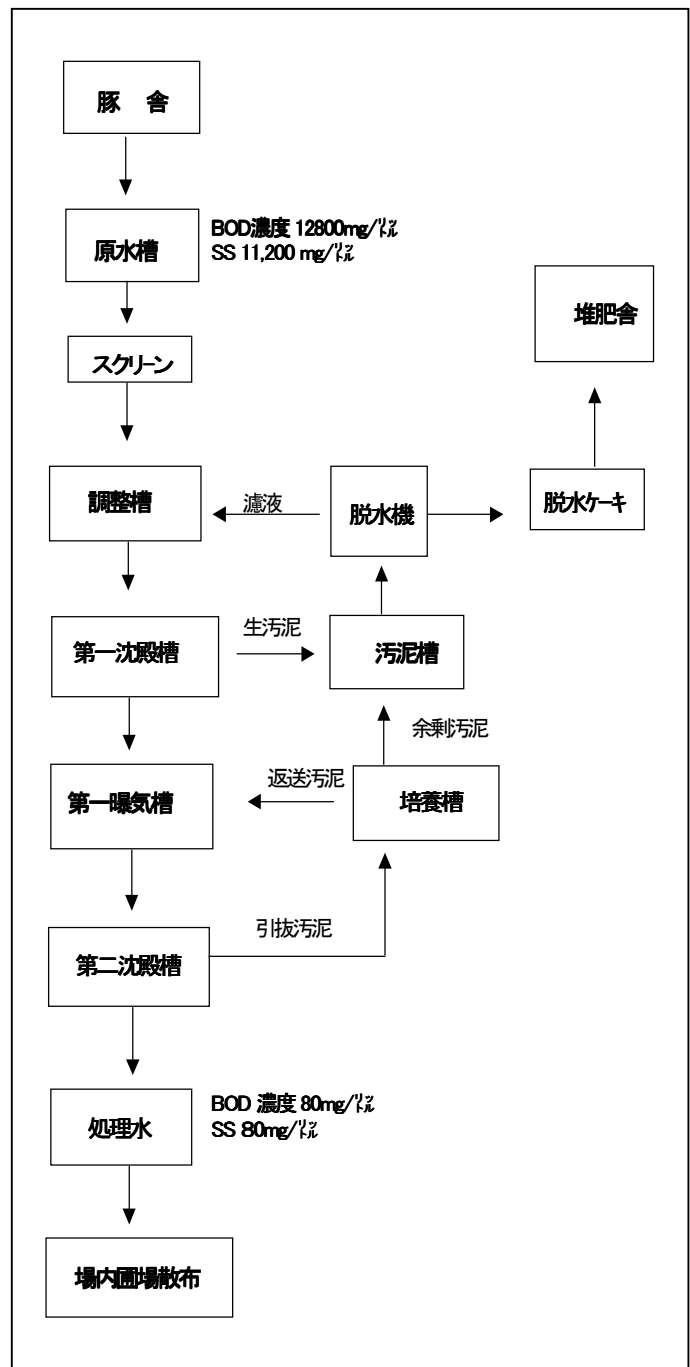
第一沈殿槽の上澄み液を第一曝気槽へ送り連続的に曝気する。次に第二沈殿槽へ混合液を送り静置すると上澄み液と沈殿汚泥(微生物の塊=フロック)に分離し、曝気槽のSV(汚泥量)を毎日把握しながら曝気槽へ返送するか、または、余剰になった汚泥は凝集剤で固定化して脱水機で絞り堆肥化処理する。上澄みの処理水は放流基準値を達成しているため河川への放流可能である。

しかし、放流河川の支流は清流が流れていることから経営主自ら環境を重視し圃場に散布している。

(堆肥処理フロー)



(汚水処理フロー)



2) 家畜排せつ物の利活用

(1) 固形分

| 内 容 | 割合 (%) | 品 質 等 (堆肥化に要する期間等) |
|-------|--------|--------------------------|
| 販 売 | 2.4 | 120日～160日 熟成堆肥 |
| 交 換 | | |
| 無償譲渡 | 97.6 | 耕種農家の利用作物ごとに堆肥の熟成程度が異なる。 |
| 自家利用 | | |
| そ の 他 | | |

(2) 液体分

| 内 容 | 割合 (%) | 浄 化 の 程 度 等 |
|-------|--------|--------------|
| 土地還元 | 100 | 放流基準値達成 圃場散布 |
| 放 流 | | |
| 洗 浄 水 | | |
| そ の 他 | | |

3) 評価と課題

(1) 処理・利活用に関する評価

堆肥化処理施設について、堆肥化処理過程で効率良く処理できる構造になって、堆肥化スタート時の調整を熟成堆肥と鋸屑に発酵資材を上手く利用し良質堆肥を製造している。

熟成堆肥の活用は、耕種農家への対応も臨機応変に対応され農家のニーズに合った堆肥も製造できることが堆肥処理の強みになっている。

汚水処理について、豚舎の固液分離が計画どおり行われ施設設置完了からメーカーの指示どおり操作を行い、毎日の点検項目についてポイントをしっかり習得されている。

(2) 課 題

養豚経営を継続するうえで堆肥の処理が懸念され、家畜排せつ物処理法が制定され平成16年10月末日までに素堀り・野積み等の不適切な処理管理ができなくなることから、既に堆肥化処理施設が整備され、堆肥処理の販売及び圃場確保が心配される。

尿・汚水処理は連続式活性汚泥法で処理されているが、放流基準が現在よりも厳しくなることから、新たな設備投資とランニングコストが懸念される。

4) その他

豚舎周辺は、広葉樹林が多く、清流も流れている。この環境の中で、養

豚経営を営んで行くために、ふん尿処理を含め、環境美化には必要以上に力を入れている。

豚舎周辺には、我が家の堆肥を活用し、妻の趣味でもある花の栽培が盛んに行われている。年間を通して花が咲いている状態であり、見た目にもきれいな清潔感のある豚舎のイメージが持たれている。

4 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

J A日向肉豚部会(会長：経営主、部会員数11名)を中心に次の様な活動を行っている。

1) 生産性向上のための研修会(6回/年)

経営主は、生産性の向上が図られれば、所得はついてくることを経験してきた。このことを部会員全員が認識できるよう、地元関係機関技術員とともに技術面に絞った研修会を開催している。この研修会では、部会員の月ごとの出荷成績をオープンにし、お互い刺激を受けながら技術の研鑽に努めており、全員が県内の出荷成績を大幅に上回っている。

農家段階での新技術の導入として、経営主が率先して取り組み成功している。人工授精(AI)技術についても、全員で勉強会を開催し、更なる向上を目指している。

2) 視察研修の実施(1回/年)

養豚農家同士での視察研修、交流会等は、衛生上の問題から非常に難しいものになっている。そこで、部会では、県内に建設される養豚場の情報を事前に調べ、完成前(豚の導入前)に視察し、豚舎構造や、ふん尿処理施設の設置状況等について視察研修を行っている。

3) 婦人部研修会(2回/月)

普及センターの指導を受け、婦人部全員でパソコンを活用した経営管理の勉強会を行っている。この成果として、月ごとの経営状況が、数字で明確に分かるようになり、妻も経営に対する意識が深まってきている。

地域農業の交流としては、堆肥を地元園芸農家へ販売・譲渡を行っていることから、頻繁に情報交換は行えている。特に、堆肥の状況や耕種農家の望む堆肥について情報を頂いている。

5 後継者確保・人材育成等と経営の継続性に関する取り組み

後継者の確保と人材育成については、経営主がまだ若いことから深い考えはない。

しかし、この経営は、経営主自らが20歳の時に立ち上げた経営であり、この経営を継承したい気持ちは強く持たれている。また、子供も男の子3人と後継者候補にも恵まれている。

現段階の考えとしては、現在の経営の充実と併せて、ふん尿処理問題を完璧にク

リアーできて始めて経営継承ができることが考えられる。

そのため、経営継承には、処理施設を完璧に稼働させられる技術と、経営面での現成績維持(現所得の確保)が最大の条件と考えている。

また、現在、経営主は、1日平均9時間以上の労働となっており、これからは、成績を維持し、効率的な仕組みを考えて労働時間の短縮も後継者確保の条件と考えている。

今後、労働力の軽減のために雇用労働力の活用を含めて検討中である。

6 今後の目指す方向と課題

これまで経営主は、生産技術の向上と所得向上を目標に掲げて、色々な取り組みを行ってきた。

その成果として、家族労働で年間所得総額16,000千円以上を確保できるまでになってきた。経営開始から25年間で、JA系統から商系へ、商系からJA系統へ戻ってきた経緯があるが、それぞれの転換してきた経験は、非常に貴重な経験となっている。

特段、支援指導組織(JA組織)の支援を受けながら改善を図ったことに感謝し、今後の目標として、次のことを考えている。

部会活動として

現在経営主が会長であるJA日向養豚部会全体のレベルアップを図る。

部会全体で銘柄化に取り組む。(13年度より計画)

良質堆肥を製造し耕種農家が利用できるようJAと連携した組織づくりを行う。

個人経営として

母豚数を増やさず、出荷頭数を拡大する。

(更なる種雌豚1頭当たりの出荷頭数の向上。目標24~25頭。)

部会全体での銘柄化による売上高のアップ。

省力化と効率化を目指した、分娩舎と離乳舎の自家施工による整備。